

50 円時代の私製航空書簡実透便

永吉 秀夫

私製航空書簡の制度は1964年4月1日に始まりました。そのときの料金は50円で、この料金は1976年1月まで続きます。この時期の私製航空書簡の代表的なものはやはり50円普通切手の1枚貼りで、50円切手としては弥勒像図案の3種(茶色ゼロなし、あずき色NIPPON入り、赤色NIPPON入り)が使われています。これらの中で発売期間の短い「あずき弥勒貼り」はやや入手難でしょう。

記念切手貼りでは当時の高額記念切手貼りがいろいろと存在するはずですが、1964年の東京五輪で初めて50円額面の記念切手が発行された後、1966~75年の間に船便書状用として50円額面で発行された記念切手が多数あります。会報292号(2022年2月号)では、それらの中で「札幌五輪50円貼り」をご覧に入れますが、今回の紹介品は下のような低額記念の混貼です。



FUKAGAWA 1968.2.7 → 英国

差出の1年半前に料金改訂があって、国内書状料金が10円から15円になりましたが、その前後に発行された10円額面の「国民参政75年」と改訂後の魚介シリーズ「するめいか」とを2枚ずつ貼って、50円にしています。4枚も切手を貼っていますが、同じ切手が2枚ずつなので、ごちゃごちゃとした感じはありません。

そもそも私製航空書簡が認可された背景のひとつとして、海外との文通用に記念切手貼りで差出したいという要望もあったのではと推察されます。高額50円1枚貼りにせよ、低額混貼にせよ、私製航空書簡には記念切手貼りがふさわしいと思います。いかがでしょうか。

紹介品は青枠の封筒に青系統の切手が貼られている点で、落ち着いた雰囲気を出しています。消印も鮮明で、ルックスは最上です。